

## 萩藩一門、養子をむかえる

江戸時代の武家社会では、親から子へ、子から孫へ、家を守り伝えることはもっとも重要視されたことでした。

しかし、実子のみで家を伝え続けることは難しく、時には他家から養子をむかえることによって、家の継承をはかることがありました。

萩藩の一門の家々も同様に、養子をむかえた事例がありました。今回の展示では、その事例を垣間見てみましょう。

それでも養子を…

### 【資料1】「毛利伊豆病氣ニ付隠居、毛利勇之進方三七郎江家族如願被仰附候事」

毛利家文庫 31 小々控 15(20の2)

安永2年(1773)、吉敷毛利家(一門第四席)の毛利伊豆就將が体調不良に伴う隠居と、右田毛利家の毛利勇之進就任の弟・三七郎を養子をとって家督を相続することを願い出て許可されます。一門という同格の家から養子をむかえるという、一見よくあるパターンとも言えそうです。

この例で目を引くのは、この時の就將には実子がいたことです。その子は明和9年(1772、改元して安永元年)の生まれで、数えわずか2歳でした。病身とは言え、実子がありながら他家から養子をむかえるという、家を保つことの難しさを感じる一例です。

実弟を取り返してでも…

### 【資料2】「御国加判役毛利勇之進病氣大切ニ付、御役御断申出、無間死去候付御尋被成候江共、御香奠拝領被仰付候事」

毛利家文庫 31 小々控 19(49の10)

文化2年(1805)10月、病が重くなった右田毛利家(一門第二席)の毛利勇之進房良は、国元加判役の職を辞し、療養に努めましたが亡くなってしまいます。

房良には跡継ぎとなるべき実子がいませんでした。右田毛利家には当時、次弟の義三郎がいましたので、彼を候補とすることをまず考える必要があったでしょう。ところが彼はまだ4歳と幼く、しかも虚弱体質だとのこと。そこで、寄組・児玉家に養子に出していた長弟の政之助(当時13歳)を引き取って跡継ぎにするよう願い出たのです。

この願いは聞き届けられ、政之助が房良の跡を継ぎました。

ちなみに、養嗣子を実家へ帰さなければならなくなった児玉家は、新たな養子が決まるまでの間に万が一当主が死去しても無嗣断絶とならないよう藩の了解を得てい

ます。

血筋の者を跡継ぎに…

**【資料3】「繁沢勘解由跡職毛利猪之助江被立遣候事」**

毛利家文庫 31 小々控 10(11の5)

寛保2年(1742)4月、益田越中元道(永代家老)が病に罹ります。不幸にして跡継ぎとなる男子がいなかったため、繁沢勘解由利充(寄組)を後継の第一候補とします。ただし利充はすでに他家を継いでいるためそれが叶わない場合には、末家の益田隼人を第二候補としたいと願って亡くなりました。

ところで、元道はなぜ繁沢利充を跡継ぎへと願ったのでしょうか。それは彼が「先祖牛庵血脈」の者であったからです。「牛庵」とは萩藩の初期藩政下で重職を担った元祥です。その次男景祥を祖とする寄組・益田家の三代就高の子が利充だったことから、牛庵の系譜を引くとの理屈が成り立ったわけです。

藩としては、血脈の者か末家の者を候補にしながら藩命に従うとした元道を殊勝とし、利充への家督相続を許可しています。そして、利充の跡は、阿川毛利家(一門第5席)の毛利就貞の弟・猪之助が入嗣し、繁沢家を継いでいます。

藩主の子をむかえても…

**【資料4】千之助様御事、毛利六郎左衛門為養子被遣候記録**

毛利家文庫 46 吉凶 139

右田毛利家の毛利六郎左衛門就信は、後継者が早世してしまったため、天和3年(1683)、萩藩2代藩主毛利綱広の子・千之助を養子にむかえることになりました。

この時、時の藩主であった吉就(3代藩主、千之助の兄)は、就信と千之助が親子となった際には、就信の実子同然の扱いとすること、また格式の変更などは伴わないことを就信や岩国の吉川家などにわざわざ伝えています。

この例は、江戸時代になって藩主の子息が一門の家に入嗣する最も早い事例のひとつでした。そのため、藩主の子息の入嗣があっても、一門家それぞれの格式に変更はないことをあえて明示したのかもしれませんが。

なお後に千之助は、兄の死去に伴って萩藩4代藩主・吉広となります。